

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720169

研究課題名(和文)多様な可能性に開かれた会話活動への適応を支える生態学および認知的基盤の探索

研究課題名(英文) Research for the Ecological and Cognitive Base Systems Orienting Our Practice in the Conversational Activities with Diversity Potentials of Development

研究代表者

名塩 征史(Nahio, Seiji)

静岡大学・グローバル企画推進室・助教

研究者番号：00466426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、会話とその他の活動の同時並行的な実践、すなわち会話活動のダイナミクスについて、行為主体の外部に実在する環境(ヒトやモノ)との関連と、行為主体の内部に記憶や経験の積み重ねによって定着した認知との関連を包括的に捉え、それらの関連性が観察可能な現象として顕在化する事例を会話分析的手法によって分析・記述したものである。

言語的行為と身体的行為を並行させる上で、行為主体がその場の環境的・慣習的・社会的枠組みにどのように支えられ、限界づけられているのか。具体的にどのような実践によって、それらの枠組みへの適応が実現するのか。これらについて、本研究ではいくつかの有意義な知見を示唆することができた。

研究成果の概要(英文)： This research focused on some interactive communications in which 2-4 participants performed conversational activities, and clarified the dynamics of the multi-activities including conversations related to both the participants' perception of the reality surrounding themselves and their cognition established by increasing their experience and memories.

Analyses of the cases which embodied the coordination between the perception and the cognition showed some significant findings about how the participants could be empowered or restricted with the environmental, conventional and social frameworks, and what kind of practice enabled the participants to accommodate themselves to those frameworks.

研究分野：認知言語学

キーワード：会話 / 相互行為分析 思考 / 認知の共有 活動システム 情報の探索と抽出 身体的思考 言語 / 分析的思考 環境と行為の切り結び

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初に至るまでの語用論や社会言語学においては、会話のダイナミクスやその一部としての各発話(行為)をある種の規則、条件、原理などに基礎づけ、その本質を説明/理論化する傾向にあった。しかし、現実の会話は、そのように過度に整然とした規則的な動きに終始しているわけではない。会話活動に参加する参加者は、各々他者とは異なった意味や語用の体系、社会的背景、経験、知識を持っており、それゆえに、参加者間では多種多様な「ズレ」が絶えず生起している(小山 2011)。現実の会話においては、「個人内および個人間における、さまざまな意図たちの出現・競合・実現・消滅」が起きているのであり(本多 2005) その結果として、時には相互疎外や敵対関係が生まれ、或いは、未知の人物と相互理解に達したという(自己充足的な)連帯感/共感を獲得するに至る(小山 2011)。報告者は、このような概して円滑で協調的な相互行為について、時折見え隠れする参加者間のズレ、協力の「淀み」等を不可避な現象として重視しつつ、包括的に説明する試みが為されるべきであろうと考えた。

報告者は平成 23 年度までの研究において、生態学的アプローチから、3 名以上の日本人が参加する多人数会話を観察し、各参加者の能動的/主体的な(言語的および非言語的)相互行為と周囲の環境との体系的・機能的な関係性について分析・考察してきた(名塩 2011)。生態学的アプローチとは、生態心理学における諸理論を基盤とする視点である。生態心理学では、長きに渡って分離されてきた「行動」と「心理」を、ダイナミックな一つのシステムとして捉え直すことを目指す。ある環境内での実践、すなわち「行為」と、その環境について知るという心理的なプロセス、すなわち「知覚」は不可分な関係にあり、我々は知覚によって周囲の環境から探索・抽出された情報をもとに次なる行為を調整し、その行為がさらなる知覚可能な情報を生み出していく。このような〔知覚-行為〕システムを駆使して我々活動の主体(知覚者/行為者)はどのように周囲の環境の中に自己の能動的な活動の場を切り開くのか。生態心理学は、こうした主体と環境との間に起こる適応の過程を エコロジカルなこととして包括的に説明しようとする学問である(Gibson 1966; Reed 1996)。報告者は、こうした生態学的アプローチから会話や言語コミュニケーションを分析しようとする試みを通して、会話の包括的な記述に有効な方法論といくつかの基礎的な知見を獲得していた。

本研究は、以上のような背景に基づき、平成 25 年度以降も生態学的アプローチを引き続き採用し、その新たな可能性を模索しつつ、

多種多様なズレや淀みを経て試行錯誤的に構築される会話活動の仕組みを明らかにすることを目指して開始された。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、ビデオカメラによって収録された多人数会話を会話分析的手法によって分析・記述し、その結果をもとに、多様な可能性に開かれた会話活動において各参加者が複数の可能性を適切に切り盛りし、現行の会話活動のダイナミクスに適応していく試行錯誤的な実践と心理の機能体系を包括的に説明する理論、もしくは方法論を提案することにある。

具体的な会話活動の事例を観察・分析する経験的な手法によって会話における各参加者および参加者間の活動とそのダイナミクスを捉え直す。特に、本研究開始以前の会話研究では注目されてこなかった参加者間の協力の「淀み」、すなわち、決して円滑とは言えない試行錯誤的なやり取りを分析・考察し、会話の構築におけるその有意性を明らかにする。そして、それらの背景に存在するであろう各参加者に固有の認知イデオロギー(社会や文化に関する認識、記憶、信念、偏見、トラウマなど)が、円滑で洗練された会話活動の実践とそれに対する適応において、どのような状況でどのような影響を及ぼすのか、様々な関連学問の知見を参考に、実践と心理(〔知覚-行為〕とイデオロギー)の間にある体系的/機能的な関係性について考察し、複数の可能性に開かれた会話の様相を説明する上で有効な新たな機軸を打ち出すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は平成 24 年度から平成 27 年度までの 4 年間(1 年の補助事業期間延長を含む)で行われた。

(1) 研究の序盤から中盤では、観察・分析の対象となる具体的な会話活動の事例(元データ)を、10~20 名の協力者を募った上で収録した。データの観察・分析は、会話分析的手法によって言語/非言語行動を書き起こしながら行われた

まずは元データから抽出された個々の現象/場面の詳細な分析・考察を行い、その結果を元データ全体のミクロ/マクロ社会的な環境や活動全体の流れの中に埋め込み、再検討するという循環的な手順で進められた。

(2) 研究の終盤では、会話活動のダイナミクスや機能的システムなどに関わる新たな議論の方向性を見出し、従来の研究理論/知見との照合を通して、最終的に今後の会話研究に有効な、新たなアプローチや知見を論考としてまとめた。

4. 研究成果

(1)平成 24 年度では、日本人 3~4 名による雑談を収録した元データの観察と分析を通して、次のような現象に注目し、分析と考察を行った。まず、本研究の焦点である「多様な可能性に開かれた会話において各参加者が複数の可能性をとどのように適切に切り盛りしているのか」について、各参加者が会話の場に実在する環境（ヒトやモノの配置）をどのように捉えるかという認知が重要な手掛かりとなることを明らかにした。この知見は、会話の基調とも言える言語的な発話が、その場で何をすべきかを直接伝達しているのではなく、その発話が伝達する情報が周囲の環境・状況の捉え直しを促し、そうした捉え直しがその時その場の行為の可能性を特定するという生態心理学的な観点を会話研究に導入する意義を示唆するものである。

また、もう一つの方向性として、共同作業を行う参加者たちが互いの思考/認知をどのようにして共有するのか、またその共有過程に会話がどのように関わっているのかを考察した。この考察を進めるにあたっては、日本人 2~3 名による共同作業を対象データとして新たにビデオカメラで収録した。

当該年度における分析・考察の結果として得られた知見には、大きく分けて次の 2 点が挙げられる。第一に、参加者間で互いの思考/認知の共有は、互いの推論を言語的/非言語的に表出し伝え合いながら試行錯誤の末に達成される。相手の認知に関するひとつひとつの気づきや解釈は、常に共同作業の目的達成に向けて正の効果をもたらすわけではない。第二に、各伝達もたらす認知効果には、観察可能な現象の記述を通して明らかにできるような質的な違いが存在する。この知見は、会話活動/共同作業の認知的な基盤を経験的・質的な研究方法によっても十分に記述可能であることを示唆するものである。

(2)平成 25 年度では、平成 24 年度に引き続き、次の点についてさらなる分析と考察を行った。まず、その場で何をすべきかを明らかにするのは、発話から得られる言語的な意味ではなく、むしろ活動主体を取り巻く周囲の環境・状況に潜在的に備わる情報の捉え直しであることを改めて提唱した。活動主体は、目標となる活動に必要な基盤として周囲の〔ヒト〕と〔モノ〕を選択的に関連づけ、当該の活動システムを抽出している。また、その活動の中に複数の主体の同調を必要とする相互行為が含まれる場合には、特定の活動システムを主体間で同期的に抽出する必要があり、発話は、「いつどのシステムを抽出するか」を主体間で共有すると同時に、当該の活動システムを始動させるきっかけとして重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

また、平成 25 年度からは、会話活動中の語りに注目し、その語りに伴う身振り（ジェスチャー）についても分析と考察を行った。

特に語り手がある事柄について自己の経験をもとに意見を述べるという抽象的な語りに伴う身振りに焦点を当て、そうした抽象的な身振りが自己志向的に繰り返されることによって、語り手自身の言語化（語りの適切な組織化）に貢献していることを指摘した。さらに、そうした語りと身振りが会話活動中に生起する場合には、他者から観察可能な事象として捉え直される必要があり、本来は自己志向的であるはずの抽象的な身振りが、相互行為上でどのような事態を引き起こしているのか、その可能性についてさらなる分析が必要であることを主張した。本研究では、語り手の自己志向的な身振りが、他者から適切に受け流されることなく、予期せぬ反応を引き起こすことで、現行の語りが頓挫してしまう事例を示し、語り手の身振りを巡る他者の態度にも重要性を見出した。

(3)平成 26 年度では、前年度までの研究成果を生かした応用研究へと一歩踏み出し、実際の社会活動を研究データとして使用する事例研究を行った。具体的には、理容室における〔理容師-被理容者〕間コミュニケーションの分析に着手し、その実践事例を基に文化人類学、言語人類学、ジェスチャー研究、マルチモーダル分析といった分野の知見の統合を試みた。この試みによって、日常的な言語活動と、それとは目的を異にする別の身体的活動の並行・両立（例えば、「世間話をしながら髪を切る」など）の実態が明らかとなり、その並行・両立の基盤として、主に発話の組織化に志向する分析的思考と、主に身体活動の調整に志向する身体的思考の切り結びによって創発する動的な活動システムの存在を示唆した。

また、上記のような新たなデータの導入により、前年度までの多人数会話研究との比較が可能となり、主体と環境との有機的な関連について新たな知見を得ることができた。たとえば理容室はすでにその行為に特化した環境としてデザインされた場であるため、理容師をより理容師らしくする行為は理容室における様々なモノや空間の配置に制限されながらも効率よく実践されていた。一方、特定の行為に特化してデザインされたわけではない多人数会話の場においては、個々の行為が周囲の環境を必要に応じてデザインし直し、たとえば過去の経験を語る場面では、実際にはその場にはない環境やモノが、あたかもその場にあるかのように振る舞うことで臨場感が演出され、他者の志向をその語りの共創へと導いていた。このように環境と行為の関連性における「環境から行為へ」「行為から環境へ」という 2 つの方向性を具体的な事例を基に分析・記述することができた。

(4)補助事業期間の延長によって継続を認められた平成 27 年度では、前年度後半に着手した実際の社会活動（理容室におけるコミュ

ニケーション)を対象とした研究を進め、さらなる分析と考察を試みた。また前年度までに扱いきれなかったデータの分析も行い、その成果と上記事例研究の成果との整合性について検討した。

平成 27 年度では、認知的基盤によって支えられた言語的行為と生態学的基盤によって支えられた身体的行為との協調と競合に焦点を当て、本研究の主題でもある会話活動への適応を支える生態学的小および認知的基盤に関する知見を整理し、一貫した議論としてまとめ上げることを目指した。まず、主に前年度までに力を入れてきた多人数会話研究の総括として、会話と他の活動との共在について捉え直し、その共在が会話の動向にもたらす変化について改めて記述した。具体的には、「現行の会話から逸脱したもう一つの会話が、現行の会話を妨げることなく開始され、現行の会話と並行する」という会話の分裂(schisming)について、その生起条件や、開始と終了の様相に、会話と他の活動との並行が深く関連していることを示唆した。また、この分裂現象の分析から得られた知見を理容室におけるコミュニケーションの分析にも応用し、身体的行為としての理容行為と言語的行為として会話の並行・両立のメカニズムについて説明を試みた。

さらには、そうした並行・両立の様相と、理容室や理容行為を巡る環境的・社会的・慣習的な枠組みとの関連について論じ、実業における参与の枠組みについて、生態学的・認知的コミュニケーション論の立場から論考をまとめることができた。

<引用文献>

小山 亘、近代言語イデオロギー論:記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史、三元社、2011

名塩 征史、生態学的アプローチで捉える日本語会話のダイナミクス 会話の場の 赴き)を基盤とする〔知覚-行為〕と認知的理解、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士学位論文、2011

本多 啓、アフォーダンスの認知意味論:生態心理学から見た文法現象、東京大学出版会、2005

Gibson, J.J., *The senses Considered as Perceptual Systems*, Houghton Mifflin Company, 1966

Reed, E.S., *Encountering the World: Toward an ecological psychology*, Oxford University Press, 1996

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

名塩 征史、語りに伴う抽象的な身振り-語りの構成・展開との関連に焦点を当てた事例研究-、日本認知言語学会論文集、査読無、14巻、2014、442-445

名塩 征史、ある行為の可能性を備える環境の捉え直しとそのきっかけとなりうる一語発話-〔知覚-行為〕との関連で見る発話の効果-、メディアコミュニケーション研究、査読有、65巻、2013、13-35
<http://hdl.handle.net/2115/53597>

名塩 征史、相互行為における認知効果の意義-話し合いながら考える活動の観察と分析-、日本認知科学大会発表論文集、査読無、30巻、2013、157-166

名塩 征史、「解釈の枠組み」の形成と共有-「何を表現しているか」を考え話し合う活動の事例研究-、メディアコミュニケーション研究、査読無、64巻、2013、87-106
<http://hdl.handle.net/2115/52631>

〔学会発表〕(計8件)

名塩 征史、会話の分裂を巡る投機的な発話と活動の分岐-音声会話の場の変容に関する事例分析-、社会言語科学会、2015年9月5日~2015年9月6日、京都教育大学(京都府京都市)

名塩 征史、枠組みを象る・枠組みを受け容れる-「参与」に係る認知的思考と実体との切り結び-、ラウンドテーブル「参与(関与)枠組みの不均衡を考える」、2015年2月20日~2015年2月21日、愛知大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)

名塩 征史、理容師の仕事を支える言語行動-理容室における語用の事例研究-、対照言語行動学研究会、2014年11月1日、青山学院大学(東京都渋谷区)

名塩 征史、理容行為を巡る様々な発話の組織化、社会言語科学会、2014年9月13日~2014年9月14日、立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)

名塩 征史、発話・行為・環境-会話活動の中で発話を捉え直す-、対照言語行動学研究会北京シンポジウム、2014年3月22日、北京外国語大学日本研究センター(中華人民共和国)

名塩 征史、語りに伴う抽象的な身振り-語りの構成・展開との関連に焦点を当てた事例研究-、日本認知言語学会、2013年9月21日~2013年9月22日、京都外国語大学(京都府京都市)

名塩 征史、相互行為における認知効果の

意義-話し合いながら考える活動の観察と分析-、日本認知科学会、2013年9月12日～2013年9月14日、玉川大学（東京都町田市）

名塩 征史、語る活動が創出する仮想環境に応じた各主体による自己の捉え直し、対照言語行動学研究会、2012年11月24日、青山学院大学（東京都渋谷区）

〔図書〕(計2件)

片岡 邦好、池田 佳子、秦 かおり、名塩 征史 他、くろしお出版、コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性、2016 発行予定、頁数未定

今井 新悟、名塩 征史、中野 研一郎 他、ひつじ書房、認知言語学論考 No. 11、2013、448 (53-97)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

名塩 征史 (NASHIO, Seiji)
静岡大学・グローバル企画推進室・助教
研究者番号：00466426